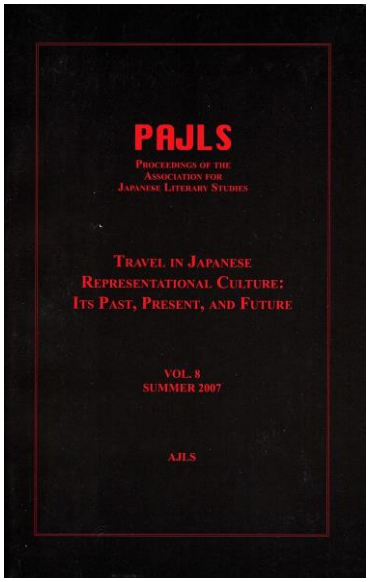
「久生十蘭の旅する少女たち」
“Girls on the Road in Hisao Jūran’s Fiction”

青山友子 Tomoko Aoyama

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 8 (2007): 354–364.



PAJLS 8:
Travel in Japanese Representational Culture: Its Past, Present, and Future.
Ed. Eiji Sekine.

久生十蘭の旅する少女たち[1]
GIRLS ON THE ROAD IN HISAO JŪRAN'S FICTION

青山友子
Tomoko Aoyama
The University of Queensland

「十蘭にたいしては、無責任な読者としておつきあいするのが、しあわせというものかもしれない」という川崎賢子氏の言葉は、[2] 長年研究を続けてこられたからこそいえる言葉であって、まだ日の浅い読者が引用しては、それこそ無責任には違いない。それでもなおかつ、この言葉を文脈も考慮せずに引用せずには、この小論は始めにくい。十蘭研究の基本線さえまだつかめないでいるのに、[3] 無謀にも発表を試みるのは、ひとつには、少女の表象という観点から十蘭の面白さについて、ぜひ何か言ってみたい、と思ったからである。もちろん、これについては、すでに川崎・堀切両氏の論文があるし、十蘭については、ほかにも、荒正人・澁澤龍彦等による全集の解説、鈴木貞美・江口雄輔・大石雅彦ほかの先行研究および評論、『早稲田文学』『ユリイカ』の特集号があるが、まだまだ限られているのではないだろうか。また、英語文献では、大森恭子氏の『新青年』研究はあるものの、久生十蘭について論じられたものを見たことがない。[4] AJLS で発表するということが、（今回は日本語での発表だが、）ひとつの契機になるのではないかと考えた次第である。もうひとつ、「無責任な読者として」でも、複数のテクストを「擦り合わせること」（rubbing）によって、エネルギーを解き放つことができるかも知れないという理屈も付け加えておこう。[5] これはもともとはジョナサン・カラーがハロルド・ブルームについ

---

[1] Acknowledgement: This is a part of my ongoing project on representations of young women in modern Japanese literature. I wish to thank the Australian Research Council for its generous support for this project.

[2] 川崎賢子「久生十蘭論」江口雄輔・川崎賢子監修（叢書『新青年』）『久生十蘭』p. 255.

[3] 橋本治も「久生十蘭を論じるとしたら、まず『よくわからない』という前置きをおくより他に手はない」としている。ただし、これは十蘭が「大人」で、「困ったことに、僕は子供だ」からだという前置きであるが。(「雨戸を閉めて」p. 17)

[4] Bibliography of Asian Studies ほかのデータベースで検索しても一つも出てこない。翻訳（英語）では、十蘭関係書では必ず触れられているように、吉田健一訳で *The Herald Tribune*主催のWorld Prize Storiesで一等を受賞した「母子像」の英訳があるのみ。しかし、アンソロジーでは、原作者の紹介は一行もないし、翻訳者の名も示されていない。（補注：この論文を提出した時点では、Michiko Suzuki 氏の論文 "Consumption and Leisure: An Intertextual Reading of Hisao Jūran's *Kyarako san*" PAJLS vol. 7, 2006, pp. 78–84 はいまだ出版されていなかったために、まことに残念ながらここに加えることができなかった。校正終了後にこの注を加えることができたのがせめてもの幸いである。）

[5] "…what I shall call 'application': the rubbing together of two texts in order to

てコメントしたときに使った言葉で、従来の、影響関係や元歌探しのような狭い意味での比較ではなく、複数のテクストを考えるということだが、カラーが使った時点では、少なくとも擦り合わせるべきテクストは、先行テクストという前提があった。しかし、次のような、さらに自由な解釈もされている。

> テクストの擦り合わせにおいては、影響研究の場合とは違い、必ずしもクロノロジカルな時間順序･秩序を考慮する必要はないということである。さらに言うなら、擦り合わせの現場に並び置くことの出来るテクストについては、特別な制限は何も無い。テクスト双方を繋ぐ関係性が皆無であろうと、テクストの擦り合わせは常に可能なのである[6]

本稿では、この自在さを、上で使った「無責任」さという言葉に擦り合わせたい。つまり、影響関係や上下・前後関係に囚われずに、テクストを擦り合わせることによって、エネルギーが放出され、見えてくるものがあるということを示したい。川崎氏は「十蘭を読むことはインターテクスチュアリテイなぞというしかつめらしい概念を押しのけて、メディアの快楽とか、いっそカルト文学のスター十蘭とかいう、にぎやかな命名への欲望をかりたてる」とも言っている。[7] この楽しさ、にぎやかさ、自由さを本論のテーマの、十蘭の旅する少女に結びつける、というのが私のもくろむところである。

久生十蘭の小説には、時間・空間の移動、異郷・異文化圏での彷徨が必ずといっていいほど出てくる。「作品空間として日本はもちろん、オホーツク海の孤島からフランス、東欧の幻都マイナール、オランダの一小村、そしてありえぬ地底世界まで、また時間的には江戸時代や明治期、現今の時代の最先端から一億数千万年前のジュラ紀まで、時空を縦横に大きく取」るのである。[8] ここではタヌ（『ノンシャラン道中記』1934 年）・キャラコさん（同名の小説 1939 年）・だいこん（同 1947～48 年）という三少女の、越境・冒険・逃避・観光・見学などのモチーフを検討する。三作はそれぞれ戦前･戦中･戦後の文化･時代背景を反映しているが、同時に反時代、超時代性も見出すことができる。少女たちの移動に伴って描かれる異郷の風景や文化・言語にも、変形、侵食、転倒がみられる。さらに、こ

---

release energy' (Jonathan Culler, "Presupposition and Intertextuality", p. 1387). ジョナサン･カラーの「テクストを擦り合わせること」およびハロルド･ブルームの、影響関係を問わない「読み」については、土田知則『間テクスト性の戦略』pp. 76-79 を参照。なお、影響＝父、それに対して間テクスト性＝母という見方（同書 p. 94）も、考慮に入れたい。

[6] 土田『間テクスト性の戦略』p. 77.

[7] 川崎「久生十蘭論」pp. 274–5.

[8] 江口雄輔『久生十蘭』p. 131.

れらの少女たちは言葉においても、性別、身体・階級・貧富の差についても、偏見や劣等感から全く自由であるという点に注目したい。

ノンシャランのタヌ

『ノンシャラン道中記』は、ここで取り上げる三作のうち、最も早く、本名阿部正雄の名で『新青年』に発表された。年のころ十八、九、人間というよりは狸に似たタヌ嬢と、その相棒狐野コン吉の二人組のフランス珍道中を描いたもので、西仏蘭西沿岸の離れ小島（ベル島 Belle Île）[9] に始まり、ニース、モンテ・カルロ、コルシカ島、マルセーユ、モンブラン、ブルゴオニュと旅は続く。美しい風景や珍しい習慣の描写あり、しかも謝肉祭や花馬車の競技、カジノ、闘牛、など見所満載、そしてもちろん行く先々で二人は珍事件に巻き込まれる。戦前のナンセンスとモダニズムを代表する作品といえる。

この作品で目に付くのは、コン吉とタヌを指すのに、まるで枕詞のように、東洋人、東洋的という言葉が使われていることである。つまり日本人対日本以**外人**（あるいはフランス人、西洋人）ではなく、西洋対東洋という図式のほうが一応は強調されている。ただし、二人のことを、顔立ちは東洋人だが、フランス語を話すからフランス人なんだろうと考える「質朴な島の住人」[10] などもいる。しかしたいがいは、「支那人（シナノア）・安南人（アナミ）」としょっちゅう間違われるだけでなく、その振りをさせられる羽目になる。ニースの謝肉祭では、支那の王族張（チャン）氏夫妻ということにされてしまう。つづく花合戦では、「日本人と中華民国人の微妙なる差別を広く一般に示すはこの時なり」と、タヌキ嬢はなでしこ染めの長振袖に金襴の帯という「東洋的令嬢（にほんのおじょうさん）」のいでたちで現れるのだが、その「にほんのおじょうさん」という読み方は、十蘭のテクストでは、「東洋的令嬢」のルビとして表記されている。つまり、二人の意識では（そして日本の読者にとっては）日本のお嬢さんの格好であっても、周りの目には、ただ漠然と東洋的としか映らないのである。たまに「日本人（ジャポネ）」に会いたいと思っていたという人物がいるかと思えば、日本人の水夫に弟を殺されたから「よくお礼をいいてえと思っていたのさ」[11] という物騒な相手、しかも出会ったのは山の中、何とか逃れて、やっとたどり着いた宿の主（あるいは料理人？）がなんとそのこわい男だったりするが、結局「日本人（ジャポネ）ってのは野蛮で勇気がある」と聴いていたのに、あなたの臆病なのには驚いた、とコン吉は笑われるだけですむ。つまり、日本人と認められたいようなときには認められず、決

---

9 小説の中でも、サラ･ベルナールが滞在したことが言及されるが、ほかにクロード･モネも逗留し、風景画を残したことで知られる、名の通り美しい島だということである。

10 『久生十蘭全集』第 4 巻 p. 9.

11 『久生十蘭全集』第 4 巻 p. 31.

して一緒にされたくないような乱暴者と、たまたま国が同じというだけで同一視されるのだ。

＜～と思いきや、実は･･･＞というアイデンティティの曖昧さおよび転倒は、探偵小説では常套、冒険物やロマンスなどでもよく使われる。次にとりあげる「キャラコさん」でもよくでてくるが、この『ノンシャラン』では、これはもう常套を越え、常軌を逸するぐらいに、過剰に過激に使われている。フィンランドの公爵のはずの人物が、実はマルセイユの馬具商で精神病院在住のモンド氏だったりする。これはもちろん、ナンセンスな法螺話、スラップスティックを生み出す一手段でもあるが、文化的ステレオタイプに対する批判･揶揄でもある。

この『ノンシャラン道中記』と「擦り合わせ」て読むには、何が効果的だろうか。もうすでに、同時代でしかも十蘭と親交のあった谷譲治の「めりけんじゃっぷ」ものや岩田豊雄（獅子文六）のフランスもの、横光の『旅愁』との比較はなされている。[12] 宣伝文句に使われた、弥次喜多との比較も可能だろう。映画に強い読者なら、戦前のスラップスティック道中ものと比べたくなるかもしれない。[13] 私はこれらに加えて、荻野アンナの横光パロディ「旅愁の領収書」をあげたい。ほかにも、森鷗外、遠藤周作、辻邦生、小川国男などの留学ものヨーロッパものと「擦り合わせる」と、「エネルギーが解き放たれる」に違いない。また、部分的には、たとえば、第一話の「八人の小悪魔」の中の、タヌ嬢が、預かった八人の子どもたちに「オルガン遊び」と称して、ゲームを教える、という話などは『サウンド･オブ･ミュージック』の「ドレミの歌」にぜひ擦り合わせてみたいものだ。マリアのほうは、子どもたちのお父さんと結ばれるが、タヌにはすでにコン吉というパートナーがいる。『ノンシャラン』では、ロマンスは、むしろ、子どもを勝手に二人に預けて恋人を追いかけて島を出てしまった後家の母親のほうが引き受けているのだ。

タヌとコン吉は、行動をともにしているが、別に夫婦というわけではない。コン吉はコントラ･バスを、タヌは美術を学ぶ学生、ということらしいが、学業･修業の話はほとんど出てこない。二人とも言葉や慣習でおろおろしたり、東洋的容貌や出自に劣等感を持つなどということはまったくない。支那人に間違えられようが、安南人に間違えられようが、大して気にする様子もない。コン吉は神経衰弱になったりもするが、タヌは終始一貫して元気で、諸事の決定権は彼女にある。コン吉はひたすら振り回されるばかりだ。したがって、「旅愁の領収書」の女主人公がコメントしているような、「こうしてみると『旅愁』の二大テーマである千鶴子への愛と

---

[12] 川崎「久生十蘭論」pp. 260–266. 江口『久生十蘭』p. 169. 堀切『日本脱出』pp.161–2

[13] 尾崎秀樹の解説（「久生十蘭全集」第六巻 p. 344）には、「アメリカのどたばた喜劇とは異なるフランスの軽妙な喜劇映画でも見るような味わい」とある。

日本への愛は、原材料が劣等感で思い込みが起動力という点でチョボチョボね。」[14] といった世界からはかけ離れている。

キャラコさん

十蘭の小説の少女主人公たちは、ジェンダーと言語･文化の違いに関してだけでなく、階級や貧富の差についても、劣等感、あるいは優越感というものから開放されている。『キャラコさん』は、1939 年、『新青年』に連載中、第一回「新青年賞」を受賞し、映画化されるという人気者である。軍人の娘で本名が質実剛健の剛の字のつよ子、艶子でも露子でもない、またあだなのキャラコは伽羅枕の伽羅ではない、絹ではなく金巾の下着をつけているからだ、といえば、コチコチの軍国少女かと思うが、そうではない。三万円拐帯犯人であることを隠すために傷痍軍人の振りをしていた青年も、真心からの親切で、知らないうちに改心させてしまうし、一見荒っぽい山男、実は愛国的科学者たちのグループにつっけんどんにされても、おじることなく、立派にその力を発揮して認めさせるし、次から次へと難関に果敢に立ち向かい、老若男女みなに愛され頼りにされる、といえば、出来すぎのスーパー少女という感じは否めない。

普通、愛すべき少女主人公なら、孤児であったり、継母にいじめられたり、あるいはおっちょこちょいで失敗したり、一芸に秀でてもほかに何か弱いところがあったりするものだが、キャラコさんはあまりに弱みがない。後ろめたいところ、暗いところ、恥ずかしいようなところがない。あまりにまっすぐで素直だ。軍人の娘といっても、たとえば野溝七生子（1897−1987）の 『山梔』（1926）等の小説に出てくる少女たちのように、父の横暴に痛めつけられるということはない。それどころか、キャラコさん自身も、また周囲も父親を知る人はみな、深くこの退役陸軍少将を尊敬している。キャラコさんは、明るく、物怖じせず、しかもでしゃばらず、スキーも出来ればピアノも弾けるし歌声も美しい。言葉遣いも、ほかの女の子たちのようにわざとくずした、男の子のようなしゃべり方はしないで、いつも正しく丁寧で控えめだが、言うべきときははっきりと言う。また、まるで幸田文（1904−90）の描く女性たちのように、どんなに材料が乏しくとも、自分の知恵と技能で立派な料理が作れるし、散らかった家も片付けてしまうし、家事を少しも苦としていない。病人の看護もてきぱき出来れば、小さい子どもにも大人気だ。軍国少女とはいえないけれど、19 歳の少女でありながらすでに良妻賢母の役割が立派に演じられる。[15]

こうまで出来すぎた少女は、普通、敵も出来る。幸田文の主人公たちにしても、ほかの女性（たとえば家事の嫌いな、あるいは苦手な女性）と

---

[14] 荻野『私の愛毒書』p. 153.

[15] キャラコさんは19歳ということになっている。ということは、生まれたのは1920年ごろということになる。ちなみに、この年生まれの女性には、原節子、李香蘭、長谷川町子、ミヤコ蝶々、萩原葉子などがいる。1939年の映画でキャラコさんを演じた轟夕起子は1917年生まれだそうだ。

の葛藤があったり、いじめられたりしごかれたりする。キャラコさんにも多少それは出てくる。元同級生で、キャラコさんと成績を争った、フランス系カナダ人（？）の父と日本人の母を持つレエヌさんには目の敵のように嫌われ、その兄の保羅（ポール）と共謀のわなにかけられる。危うし、キャラコ、というところで、傷痍軍人を騙っていた青年の時と同様、この兄妹も、決して悪人ではないのだということになり、[16] 結局はキャラコの友に加わる。と、この調子で、かたくなな心も、キャラコにあっては溶けてしまうし、絶望するものにも希望がもたらされる。

『新青年』の読者がキャラコさんを支持し、日本の恋人としたのはわからないでもないが、こんなに気立てがよくてみなに愛され、しかもここまでいろいろこなせてしまう主人公というのがどうして許されるのだろう。その答は、キャラコさんが、丹下左膳でも宮本武蔵でも机龍之介でもない、少女、しかも、少女向けの小説ではなく『新青年』向けの少女だから、といえるかもしれない。しかし、それではこの『キャラコさん』という小説が女性読者にとって魅力ないかというと、そんなことはない。それは、ひとつには、端役･悪役まで、いやむしろ、端役･悪役にこそ魅力的な描写が行き届いているからだ。洗練されたおじ様紳士（実は女たらし）、傲慢で身勝手な美人で金持ちのいとこ（実は家は破産）、混血のアル中不良青年（実はピアノの名手）と美人だがわがままで底意地の悪いその妹（実は気の毒な根無し草）などなど。おまけに、質実剛健といいつつも、キャラコさんは、のっけから億万長者の遺産を相続してしまうし、本人が別に行きたくなくても、特権階級の別荘だの豪華ヨットだのに断りきれないくらい招かれてしまうのだ。そして、重要なことに、キャラコさんは小説の終わりでもまだひとり身、みなに愛され、誰のものでもない。ロマンスに発展しそうなところでも、決してキャラコさん自身の恋愛物語にはならない。

堀切直人はこの模範的なキャラコさんに、「同時代の、あるいは人間性のさまざまな歪み、倒錯を」[17] 映し出す鏡としての役割をみる。しかし同時に、心正しい少女が自由に動き回り、難問も最後にはキャラコさんのお

---

[16] 兄と妹という関係は繰り返し『キャラコさん』に出てくる。川崎（『少女日和』p. 127）はその中でも特に「雁来紅の家」のエピソードで、＜兄–妹＞の愛が＜青年画家–キャラコ嬢＞＝＜作者―読者＞＜男―女＞＜犯人―探偵＞の恋愛図式にあみかえられ、しかも各図式で前者後者が交換可能になること、キャラコの旅が「アトランダムに凹凸の逆転する、つまり凹と凸との性交には回収されない、汎エロス的で無限に表層的な皮膚感覚の官能へとひらかれていく」ことを指摘している。

[17] 「作者が戦時下の社会的要請に従ってヒロインの性格作りを試みたのは確かである。しかし一方で、作者がそうした模範生的性格を曇りなき明鏡に仕立てて、同時代の、あるいは人間性のさまざまな歪み、倒錯をそのおもてにくっきり写し出そうと試みたというのも、たしかなことではないだろうか。「略」この女性像の設定によって、時代の熱狂に乗じない冷静さ、人間性の暗愚に対する健康なモラリスト的視座を手に入れられたのも、明らかな事実なのである。」（堀切「キャラコさんとだいこん嬢」『日本脱出』pp.194–5.）

かげで解決するという設定にすることによって、時局に反した贅沢や、不良青年やら少女キラーのおじ様紳士や青年スパイが描けたともいえるのではないだろうか。

だいこん

だいこんは 1945 年 8 月に 17 歳 7 ヶ月というから、1928 年生まれのはずである。18キャラコさんは口がやや大きいけれどなかなかの美人で伸びやかな肢体をもつし、ノンシャランのタヌも、愛らしい東洋的令嬢として描かれている。対するに、だいこんこと石田里子はベティさんのような顔に、トレードマークのだいこんのような脛、もっと以前は夕日が当たると燃えるような赤毛だったという。[19] ノンシャランの二人組やキャラコさんに比べると、このだいこんが 1945 年 8 月 15 日から 9 月 2 日までに移動する範囲はずっと狭い。せいぜい鎌倉･横浜･東京･浦賀･横須賀である。本稿のタイトルの「旅する少女」というのは、こうしただいこんの動きに関する限り適切ではない。しかし、この移動は日本の歴史の重大な転換期に大いに関与している。だいこんとその仲間たちは「あの方」（天皇）と日本を消滅させまいと奔走し、宮城占領事件、二十日革命、H 宮（東久邇宮）内閣成立、降伏文書の調印式など、数々の事件に、直接立ち会うわけではなくとも、すぐ近くでその波紋を体験する。さらに、1945 年 8 月から 9 月の時点では動きは限られていても、外交官の娘で 43 年に帰国するまではパリに住んでいただいこん一家、そしてその知人友人たちの欧米での活動が組み込まれている。

『ノンシャラン』、『キャラコさん』と違って、『だいこん』は一人称で書かれている。しかし、たとえば太宰「女生徒」の、少女ならこの程度の文体で、この程度の感受性、読書感想文が妥当だろう、という作者の手加減や計算の感じられる一人称の語りとはまったく違う。だいこんの原型は戦前 1939 年、キャラコさんと並行して発表された。こちらに日本降伏の歴史的エピソードが入っていないのはもちろんだが、川崎が指摘したように、戦後版の最大の特徴は、「だいこん嬢が新たに語り手でもあり、テキストの中でもうひとつのテキストを書く人でもあるという位置を与えられている点だ。」[20] もうひとつのテキストの中には、ボードレールやアポリネール、トーマス・マン、アンドレ･モロアなどの引用、パロディ、メタ･テクストもある。だいこんは、「リセの競争試験（コンクール）に歴史と論文で一等賞をとり、卒業式に大統領と握手している」[21] ような優秀な少女だが、だ

---

[18] ところが、申年生まれという記述もあり（全集第三巻 p. 8）、それには1920年か1932年生まれでなければならないから、計算が合わない。

[19] ここにルナールの『にんじん』およびモンゴメリの『赤毛のアン』を重ねたくなるのは自然だろう。にんじんは作中にも言及されている。十蘭のほかの作にも、フランス在住の赤毛の日本人少女は出てくる（たとえば「花合わせ」）。

[20] 川崎『少女日和』 p. 136.

[21] 『久生十蘭全集』第3巻 p. 24.

からこうしたインターテクスチュアリティが許される、というよりは、こうして相対的な視点が組み込まれ、対話的、ポリフォニックな構造が可能となるのである。八月十五日のだいこんの感想には、「日本人が自分の国の負けたことばかり言っていると、中国やフィリッピンに笑われるそうだ。」とあり、続けてトーマス･マンの「ドイツ人は自分の国が負けたことに病的な誇りを持っている。破滅させた他国民の惨状は知らぬ顔で、ひたすらじぶんの悲劇に陶酔している」[22] という言葉が引用されている。また結末は、聖書の詩篇からボードレールまでを使った平和と復旧への祈りになっている。

これまで『だいこん』は、敗戦直後に天皇への愛を表したという点で、太宰（『十五年間』『苦悩の年鑑』）と比較されたり、井伏『黒い雨』や武田泰淳の『貴族の階段』や十蘭自身のほかの作品と比べられたりした。[23] これらのほかに、擦り合わせて読むには、Gyp（森茉莉の表記ではジイプ夫人）の戯曲、というか、会話形式の *Mademoiselle Loulou* (1888 森茉莉訳『マドゥモァゼル・ルウルウ』1933 年)[24] はいかがだろう。14 歳 6 ヶ月のこの少女は勉強嫌いだが、大人顔負けに本も読むし政治や芸術を論じる。言葉遣いが悪いと父親に注意されると、だって「私は羅典語と英語を知つてて、独逸語と希臘語を習つてるんでせう？．．．だからもう仏蘭西語をする時間なんて無いぢやないの」[25] と答える。少女の目を通してみた上流社会の風俗が風刺、ユーモア、エスプリたっぷりに描かれているという点では、英国の Nancy Mitford (1904–73)の *The Pursuit of Love* (1945) *Love in a Cold Climate* (1949) もあげられる。こちらは時代的にも、近い。

むすびにかえて

ここで取り上げた十蘭の三作の主人公たちは、それぞれはっきりした個性を持ち、年代的にも少しではあるけれど、ずれている。しかし三人に共通しているのは、家庭や学校、寄宿舎などに閉じ込められず、広範囲をかなり自由に動き回るということである。少女であるということによる社会的･経済的制約は、ほとんど感じさせない。タヌとだいこんはもとより、控えめなキャラコさんでさえも、必要とあれば、相手の年齢･性別･社会的地位に関係なく、対等にわたり合うことが出来る。キャラコさんは、先に触れたように、少女でありながら良妻賢母のようなところがあり、知識人気取りの女性に、「あたしの自覚は、丈夫な子供を生んで、それを立派に育てることなの」と、「うっかり口をすべらし」26たりもする。このキャラコさんと、わんぱくな男の子のようでいてコケティッシュなところもあ

---

[22] 同上 p. 9.
[23] 川崎『少女日和』pp. 140–151.
[24] 『新青年』1927年12月号に掲載された赤木啓春の「少女ルル」(pp. 62–75) は、これとは関係ない推理短編小説である。
[25] 『森茉莉全集』第8巻 p. 22.
[26] 『久生十蘭全集』第7巻 p. 231.

るタヌやだいこんは、まったく違っているようでいて、家庭生活に対する嫌悪が無いという点で一致する。タヌには母性的な面も大いにある。だいこんも、両親が素敵にマズルカを踊ったり、母親が高圧的な軍部のエリートとの交渉で一歩も退かない様子などを見て育っているのである。父にも母にもいじめられもせず、反抗する必要も無いのである。この葛藤の無さ、自在さ、そして戦時下･敗戦後を問わず、物資の乏しい、暗く重苦しい、制限だらけの時代にこうした少女像を描いたという点に、十蘭の面目躍如たるところがある。中井英夫が評したように、十蘭は、作者が顔を見せること、感想を漏らすことを極端に嫌ったが、珍しくも自作短編について解説した文がある。

> 「母子像」をのぞく七篇は、敗戦後の最もみじめな時代に書いた。派手めかしたアナーキーな小説になったのは、あまりにも貧窮した世相一般に愛想をつかしたせゐである。
>
> 小説の主人公は、いづれも非目的で、みないくらか西洋の暈をかぶつてゐる。この偏りは、西洋趣味といふやうなものではなくて、そのころの旅行制限の、息苦しい閉鎖状態から脱出したいといふ、願望のあらはれだったらしい。[27]

これは直接『キャラコさん』や『だいこん』について述べた言葉ではないが、中井の言うように、「貧窮した世相一般」とは、何も戦後に限られず、「ヒビアカギレの描写に詳しい小説」、「日本の文学風土全体をさしてのことだと受け取ってよい」[28] とするなら、旅する少女たちこそ、「息苦しい閉鎖状態から脱出したい」という願望の現われといえる。現代の、オタク青年のいわゆる「萌え～」[29]（というのが、たとえマスコミで騒ぐだけでなく実際にあったとして）とは、重なる部分が全く無いとは言い切れないが、少なくとも、少女に自由と主体性とを託しているという点で大いに違う。そして、脱出するというのは、単なる逃避ではなく、川崎の指摘するとおり、[30] 越境し、境界性を担うことでもある。少女の浮遊性、境界性、二重性についてはこれまで本田和子ほかの、さまざまな論考があるが、十

---

[27] 中井英夫「解説」に引用されている。『久生十蘭全集』第3巻 p. 431.

[28] 同上。

[29] 「萌える」とは、アニメや漫画などの、特に美少女のキャラクターに対して強い愛着を感じるということで、「８０年代末頃にパソコン通信のチャットで文字変換遊びをするうちに発生したと思われる用語」だという。詳しくは、ササキバラ・ゴウ『＜美少女＞の現代史』参照。

[30] 「十蘭の少女たちは繭の中で虚構をつむぐ怨恨者ではなく、世界に身をさらし、ときに攻撃的な少数者だ。俗流吉屋信子的少女原理が女学校の寄宿舎に至福の空間をみいだすのにたいし、十蘭的少女原理はことさらな彷徨を選択する。少女たちはあるとき異人として共同体を訪れ、隠されていた危機の所在を明らかにし、またあるときは外からやってきて境界線上にたたずむ来訪者に手をさしのべ、内部に導き入れる。」（川崎『少女日和』p.106）

蘭の少女たちのように、闘いとらなくてもあらかじめしっかりとした主体性がありながら浮遊彷徨するケースというのは、珍しい。物があふれる現代でも、世相の貧窮を感じる人は少なくは無いだろう。タヌの、キャラコさんの、まただいこんの物語の豊かさは、決して時代と共に衰えるものではない。17 歳のだいこん嬢は、ミズーリ艦上での調印式の無事終わったころ、こう言っている。

> 原子爆弾の洗礼を受けたのは日本だけだから、自らの体験によって、これからの戦争は危険だと警告する役をひきうけ、世界平和を建設するための有効なアポッスルになり得る。あの方が考えていられるように、戦争放棄の新しい憲法でも出来たら、咲く花は小さくとも、世界に二つとないユニークな花になるだろう。[31]

「あの方」の意向はともかく、ユニークな花が咲いたのか、考えてみる価値はあるのではないだろうか。

参考文献

Culler, Jonathan. “Presupposition and Intertextuality”, *MLN*, 1976, vol. 91, no. 6, pp.

江口雄輔･川崎賢子監修（叢書『新青年』）『久生十蘭』博文館新社 1992 年

江口雄輔『久生十蘭』白水社1994年

橋本治「雨戸を閉めて」『早稲田文学』第８次通号90（特集　久生十蘭）pp. 17–25.

久生十蘭『久生十蘭全集』三一書房　全７巻　1969−70 年

Hisao, Juran. ”Mother and Son”, in *World Prize Stories: Second Series/ Selected from the World Prize Stories Competition Series*, Long Acre, London, Odhams Press Limited, [1956], pp. 225–232)

本田和子『少女浮遊』青土社1986年

堀切直人『日本脱出』思潮社1991年

川崎賢子『少女日和』青弓社1990年

_____『蘭の季節』深夜叢書社1993年

森茉莉『森茉莉全集』筑摩書房　第8巻

荻野アンナ『私の愛毒書』福武書店1991年

ササキバラ・ゴウ『＜美少女＞の現代史：「萌え」とキャラクター』講談社現代新書2004年

鈴木貞美『昭和文学のために』思潮社1989年

土田知則『間テクスト性の戦略』夏目書房2000年

『早稲田文学』第8次通号90・91号（特集　久生十蘭）1983年11月・12月

[31] 『久生十蘭全集』第3巻p. 152.

『ユリイカ』第21巻7号（特集　久生十蘭：文体のダンディズム）1989年6月号

ABSTRACT

Hisao Jūran's novels contain almost without fail movement through time and space and wanderings in foreign lands or foreign cultural spheres. This paper examines the border-crossing, adventures, and sightseeing of three girl protagonists in his novels: *Nonsharan dōchūki* (A Book of Nonchalant Travels, 1934), *Kyarako-san* (Miss Calico, 1939) and *Daikon* (Giant Radish, 1947–8). The comic travels in France of Tanu ('raccoon') and her partner Konkichi ('fox') represent the 'nonsense' genre and the modernism of the pre-war period. Miss Calico (nicknamed so because she wears calico rather than silk underwear) is the daughter of an army officer and courageously confronts all sorts of difficulties: the setting, seemingly, is Japan at war. After the defeat, on the other hand, Daikon rushes about in an effort to save 'that person' (the Emperor) and the nation from extinction. While they thus reflect their respective periods, these three works at the same time contain elements that transgress and transcend their epoch. By 'rubbing' (Culler) these texts against various other texts, I will show how these girls are completely liberated from prejudices and inferiority complexes regarding differences in language, sex, gender, physical features, and class.